

ホセ・ルイス・ゴンサーレス著

『4階建ての国』

José Luis González, *El país de cuatro pisos y otros ensayos*, リオピエドラス(プエルトリコ), Ediciones Huracán, 1980年, 119ページ

I

本書はプエルトリコ人の作家、ホセ・ルイス・ゴンサーレスによるプエルトリコの文化とナショナリズムに関する論考4篇を収めた評論集である。

著者は1926年、サントミンゴで生まれたが、幼年期から大学教育を終えるまでをプエルトリコで過ごした。すでに十代後半の若さで作品を発表し始めており、特に短篇小说を得意とするプエルトリコを代表する作家の1人である。

しかし、その後著者は学生運動に関わり、プエルトリコ独立論者、マルクス主義者の立場をとり続けてきたため、1950年以降国外生活を続けている。現在はメキシコ市民権を得て国立メキシコ大学で文学の教鞭をとる傍ら、執筆活動に携わっている。

本書は120ページ足らずの比較的小さな著作である。しかし、その内容はプエルトリコの知識人の間に少なからぬ反響を呼び起こし、出版の翌年には、プエルトリコからの参加者と著者を交えて本書をめぐるシンポジウムがメキシコ市で開催された(注1)。その後も現在に至るまで本書をめぐる議論が続けられている。

II

本書の構成は次のとおりである。

「4階建ての国」(El país de cuatro pisos)

「プエルトリコにおける文学とナショナル・アイデンティティ」(Literatura e identidad nacional en Puerto Rico)

「今日のプエルトリコにおける庶民風と芸術」(Plebeísmo y arte en el Puerto Rico de hoy)

「異境流浪の作家」(El escritor en el exilio)

これら4篇の論考は最初から一定の意図をもって発表されたものではなく、それぞれ異なる機会に独立した形で発表されたものである。しかし、本書を通読すると、全体が、プエルトリコの過去から現在に至るまでの文化

状況の分析、それに関わるプエルトリコ・ナショナリズム批判、そしてプエルトリコの将来へ向けての展望の書として一つのまとまりを持っていることがわかる。ここでは特に、著者の主張が最も体系的に示され、本書の表題論文ともなっている第1論文に重点を置きながら、各篇の内容を簡単に紹介する。

1. 「4階建ての国」

この論文の書かれたきっかけは、プエルトリコ在住の学生グループが著者に対して出した次のような質問であった。

「北米植民地主義(注2)の干渉によってプエルトリコの文化はどのような影響を被ってきたと考えるか。また、プエルトリコの現在の文化の発展の状況をどう見ているか」。

著者はこのような質問に対する回答の書としてこの論文を書いた。しかしその内容は一般に予想されるものとはいささか異なるものだった。

一般に、プエルトリコ文化はスペイン文化の伝統を受け継ぐクリオージョ文化で、それがこの80余年の間にアメリカ文化の流入によって変形させられてきたという理解が常識的に受け入れられている。ナショナリストたちはこのような理解のうえに立って米国による支配を批判してきた。しかしこの論文で著者は、このような常識的理解を批判しそれによって現在のナショナリズムが抱える問題点を明らかにしようとした。この論文はプエルトリコ・ナショナリストによるプエルトリコ・ナショナリズム批判の論文である。

そこで著者はプエルトリコの文化状況の分析のための武器として階級社会の視点を前提に置いた。レーニンのいわゆる「二つの文化」論に副って、著者は一国の文化を論ずる際の前提をまず明らかにする。

すなわち、全ての階級社会には、支配者の文化と被支配者の文化、言い換えればエリートの文化と民衆の文化とが存在する。そして一国の国民文化が論ぜられるとき、それはエリートの文化のみを指しており、民衆の文化の存在することを無視している、と言うのである。

プエルトリコにおいても、今までプエルトリコの文化として論じられてきた文化とは、アセンダードや専門職業家の階級によって形成された文化のみを指しており、民衆の形づくった文化はそこでは無視されてきた、と著者は指摘する。

次に著者は、このような民衆文化への視点の欠落がなぜ生じたのかを明らかにするために、過去においてプエ

ルトリコ・ナショナリズムの内部に異なる二つの立場が存在したことを説明してみせる。一方の立場を代表するのは19世紀末の独立論者オストス(Eugenio María de Hostos)であり、他方の立場を代表するのは、1930年代以降のナショナリスト党の指導者アルビス・カンポス(Pedro Albizú Campos)である。著者によれば19世紀末のオストスが進歩的なナショナリストであったのに対し、きわめてラディカルな形態の反米闘争を指揮したアルビスは逆に保守的なナショナリストであった。

著者によれば、オストスは、スペインによる支配下において、プエルトリコの社会の発展はプエルトリコの民衆の支持を得て独立を獲得しないかぎり達成できないと考えていた。オストスにおいては民衆の存在、特に民衆を社会の発展に向けて導いていくことが重要な課題であり、スペイン人による抑圧の下に民衆が置かれたままでは、プエルトリコの発展の可能性は考えられないことに彼は気付いていた。しかし1930年に登場したアルビスのナショナリズムはオストスのそれとは性格を異にしていた。アルビスのナショナリズムは、スペイン支配下の時代の美しき過去への回帰を夢想することから生まれたナショナリズムであった。そして現在のナショナリストたちもまた基本的にはこのアルビスの立場の延長線上にあると著者は指摘するのである。

以上のような基本的視点の設定を終えたくて次に著者は、それではプエルトリコの現在の文化状況は本当はいったいどのような状況にあると理解されるべきなのか、という本論に移っていく。そしてそれは問題の性格上、スペイン人による植民以来のこの島の過去をもう一度見直すという形をとらざるを得なかった。「4階建ての国」という表現はそのようにして著者が得たプエルトリコの過去から現在までの文化の発展の全体像を比喩的に表わしている。

著者によれば、この島がスペイン人によって征服された後、最初にこの島に形成された文化はアフロ・アンティル的な民衆文化であった。これは、白人の要素を強調する従来の見解と真向から対立する。しかし、著者によれば、「衣」や「食」の面に着目すれば、この島の文化も基本的に他のカリブ海の島々の文化と共通していると言う。この島に植民した白人移住者たちも文化の基本的要素においては黒人の文化に倣わざるを得なかった、とするのが著者の見方である。これが4階建ての国の基礎、1階部分を成す。

しかし19世紀に入って白人移民奨励策が進められると

ともに、プエルトリコ文化の「白人化」が進められる。そして、スペイン文化の伝統を受け継ぐクリオージョの文化が国民文化として1階部分を押し込める形でこのうえに居坐ることになる。1階にはアフロ・アンティル的な民衆文化、2階にはクリオージョ的なエリートの文化という二階屋が19世紀にでき上がっていたというわけである。

しかし、1898年に米国による支配が始まることによって、この二階屋の上に屋上屋が積み重ねられ、さらにそのうえに、米国の支配に基礎を置いた近代化という四階屋が積み上げられるに至る。ごく簡単に言えば、これが著者の描く全体像である。

このような4階建ての国の形成の過程のなかで、19世紀のエリートたちは、米国の支配が始まり三階屋が作られるとともに、その下に押し込められ、かつての指導力を失っていく。今世紀のナショナリズムが、アルビス流の、過去を美化するナショナリズムとなったのも、ナショナリズムを担っていたかつてのエリートたちがこうして指導力を失い、自らの存立基盤を失っていったことによる。著者はこのように説明づける。

一方、19世紀、クリオージョ・エリートの支配の下に押し込められていた民衆文化はどうか。著者によれば、プエルトリコの民衆文化は逆に、エリート層が力を失うことによって、そこに新たな発展の空隙を見出すことになった。米国の支配の下でプエルトリコの文化は廃れようとしていると言うけれど、本当のプエルトリコの民衆文化はどっこい生きている。むしろ生き返っていると著者は言うのである。

こうして著者は、4階建ての国の形成過程を跡づけることによって、現在のプエルトリコの文化状況の、従来とは違う新たなイメージを描き出して見せた。「スペイン支配下の時代に現在のような女性の地位の向上を望み得たろうか」という指摘は、米国による支配のもつ意味についての著者の考え方を端的に示している。

しかし、著者は米国による支配を肯定しているわけではない。現在の植民地的状況の下では社会の退廃化が進むのは必定である。これを食い止め、また米国による支配が始まるとともに、スペインによる支配下での抑圧からの解放が始まった民衆文化の発展をさらに十全なものにするためにも、独立を達成することが必要であると著者は言う。しかしその独立は、プエルトリコの民衆文化がアフロ・アンティル的なものである以上、現在のナショナリストたちの望むような過去への回帰となつてはならない。そうではなくカリブの他の島々との連帯の方

向でプエルトリコの独立は成し遂げられなければならない。著者はこの論文をこう締めくくっている。

2. 「プエルトリコにおける文学とナショナル・アイデンティティー」

この論文では、第1論文で示された著者の見解、特に19世紀から今世紀にかけてのプエルトリコ・ナショナリズムの性格の変貌の過程が、著者の得意とする文学史の文脈のなかで語られる。前出のオストスをはじめとして19世紀後半のプエルトリコの作家、知識人の中には民衆の置かれている状況をテーマとして取り上げる伝統があった。これが今世紀に入って次第に知識人の中から消えていく、その過程を著者は辿って見せる。しかし近年、再び民衆の生活の現実に着目し、しかもそのアフロ・アンティル性をテーマにとりあげる作家が輩出し始めていることを著者は指摘し、将来への希望を繋いでいる。

3. 「今日のプエルトリコにおける庶民風と芸術」

次のこの論文では、第1論文で明らかにされた、今世紀の米国による支配下での民衆文化の上昇の過程が、オルテガ・イ・ガセーの用語、「庶民風」(plebeyismo) (注3)という概念を用いて説明される。

オルテガ・イ・ガセーはその著書『ゴヤ』において、17世紀後半のスペインにおいて貴族が没落し、それによってかつては上から与えられていた文化のモデルを失ったスペイン民衆が自らの生活のなかから独自の文化の一つの様式のなかに結晶させていった、その様式を「庶民風」と名づけた。オルテガによれば、その「庶民風」を代表するのは闘牛とスペイン大衆演劇であり、その同じ「庶民風」がゴヤの作品のなかに反映されていたのであった。

これと同様のことがプエルトリコの民衆文化のなかにも起こっている、と本書の著者は主張する。そして、プエルトリコにおいても、この「庶民風」を反映する芸術作品が生まれつつあると著者は指摘している。

4. 「異境流浪の作家」

この論文のテーマは、プエルトリコを離れて生活し、創作活動を続けている作家たちにもプエルトリコを語る資格があるか、という問題である。著者自身の場合は別としても、米国本土に移住したプエルトリコ人たち、あるいはそこで生まれ、プエルトリコを知らないプエルトリコ人たちの間から若い作家たちが生まれようとしている。彼らの作品は、プエルトリコの国民文学を構成するとと言えるだろうか。

著者の答えは肯定的である。たとえスペイン語で書かれていなくとも、またプエルトリコに住んだことがなか

ったとしても、そこにプエルトリコのネイションとしての現実が描かれているならば、それはプエルトリコ国民文学たり得ると著者は主張する。しかし、プエルトリコの文壇は必ずしも彼らに門戸を開こうとしておらず、その閉鎖性を著者は批判するのである。

III

以上のように、米国本土に住むプエルトリコ人のアイデンティティーというテーマに触れた第4論文は他の三つの論文と多少性格を異にしているとしても、本書の全体の構成は第1論文で示された、文化状況の分析、ナショナリズム批判を敷衍する性格を持っている。

プエルトリコ文化はスペイン文化の伝統を受け継いで19世紀のスペイン支配下で育まれたクリオージョ文化であり、米国による支配下に移って今日まで、それは「非プエルトリコ化」の危機にさらされ続けてきた。プエルトリコの文化状況を論ずるとき、一般に今まで受け入れられてきた理解の仕方は要約すればこういうことであった。しかし、このような理解の仕方に対して著者は、その背後にある世界観をも含めて根底から疑問を投げかけた。そして、プエルトリコ文化の過去から現在までの発展の過程の全体像を再構成することを試み、独自の世界観に立脚することによって現在の文化状況を理解するための、従来とは別な新たな視点を提示するに至ったのである。本書の価値は、この新しい視点を提出した、という一点に尽きている。

本書で示された論点の個々についてはさまざまな疑問が出され得るし、実際に多くの批判が出されてきた。著者自身が断わっているように本書は議論の出発点となるための一つの覚書きにすぎない。この120ページ足らずの小さな書物のなかで、プエルトリコの文化状況をその発展過程を含めて全体的に明らかにしようとすることは、あまりに大胆な試みであった。しかし、少なくとも議論のたたき台を提出しようとした著者の意図はかなり成功したように見受けられる。

出版直後の反響はすでに取まったが、それにかわって本書を出発点としてプエルトリコの社会・文化・歴史の現実の再構成を試みる地道な努力が始められている。プエルトリコ人の社会学者、キンテーロ・リベラの研究はその代表例であろう(注4)。

彼は特に、本書の主張の土台となっている文化状況の階級関係の視点からの分析の孕む問題点を中心に、最近の社会学および経済史学の成果に依拠しつつ緻密な検討

を加えようとしている。もとより、社会学や経済史学のみで文化の問題が解明されるわけではないが、本書に示された大胆な試論が、より厳密な分析のプロセスに移されようとしていることは確かである。

キンテロ・リベラの批判の軸は、指導者階級および民衆の形成した文化と、その各々の経済的基盤の関係づけがあまりに平板であること、現実の生産関係の場での個々の要素の複雑な絡み合いや、生産関係そのものの変容の過程が本書では見落されていること等にある。特に「4階建ての国」の構成について、それぞれの階は示してあるが、それらの間の「階段」が欠けているという指摘は十分納得できる。

本書に対するキンテロ・リベラの批判的検討の作業はまだ中間報告の段階で、他の論者も含めて、本書に対する評価の定まるのはまだ先のことのように見える。

ここでは最後に、本書を通読し、さまざまな批評に目をとおしたうえで評者の印象に残った論点を3点だけ記しておく。

まず第1点は、本書において著者がプエルトリコ・ナショナリズムのなかに一定の保守性を見出している点である。ナショナリズムがときに保守的思想となり得ることは容易に理解し得る。しかし著者は、プエルトリコ独立運動の英雄的存在であり、反帝国主義運動の闘士と見なされているアルビス・カンポスの思想のなかに一定の保守性を見出すに至った。

一般に大国のナショナリズムはともかく、民族解放の思想としてのナショナリズムは進歩的思想と見なされやすい。したがって本書に対する批判のもっとも強かったのもこの点であった。しかし、著者の主張の当否はともかく、民族解放運動、あるいは独立運動のなかに潜む保守性を改めて指摘している点で著者の主張は示唆的である。

第2点は、米国による支配について、その否定的側面とともにその肯定的側面をも指摘している点である。米国の支配下にすでに86年間にわたってとどまってきたという事実は、単に「アメリカ帝国主義」を糾弾するのみでは、プエルトリコの置かれている現実の状況を理解することのできないことを示している。しかしナショナリストのサークルのなかでは、米国による支配の肯定的側面に言及することは必ずしも容易なことではないように見受けられる。その意味で著者の主張は重要であり、特に女性の地位の向上に言及している点は他の論者にはあまり見られない視点である。

第3点はプエルトリコの文化をアフロ・アンティルの

文化と規定した点である。奴隷制の発展が他のカリブの島々に比べ弱かった点をはじめとして、プエルトリコ文化がクリオージョの文化として発展してきたという見方は半ば事実として受け入れられている。これに対して著者の主張は衝撃的であった。この点にはキンテロ・リベラも言及しておらず、容易に解決のつかないテーマであることは確かであるが、他の論点と同様、今後厳密な検討が必要である。

以上のように、本書は決して客観的な研究の成果ではなく、その論点のほとんどは試論にとどまっている。したがって本書に対する評価は唯一、新たな視点がそこに提示されているという点にのみ与えられ得るのであって、個々の論点に対する評価は、今後進められる諸研究の進展に待たざるを得ない。

しかし、一国の社会・文化・歴史の理解がナショナリズムの存在によって大きく左右されることを考えるとき(プエルトリコの場合が正にそうである)、既存のナショナリズムを批判し従来の常識的な文化・歴史の理解とは異なった視点を備えた書を手にし得ることは有益なことに違いない。特にプエルトリコのように日本に入ってくる情報量のかぎられている場合、そのかぎられた情報のなかで広い視野を獲得するための有効な材料として、本書は大きな価値を持っている。

(注1) このシンポジウムは“Puerto Rico: una visión histórica”と題して1981年7月1日～3日、国立メキシコ大学で開催された。

(注2) “colonialismo norteamericano”。周知のように現在わが国で米国を指して使う「アメリカ」という用語は本来、西半球大陸、島嶼の全体を指す用語である。したがって他の中南米諸国と同様、プエルトリコでも特にナショナリストは米国を指すにあたって「北米」(norteamérica)という用語を使用する。以下では、わが国での慣例を考慮し「米国」という訳語を使うが、原著においては著者は一貫して「北米」(norteamérica)という表現を使っていることに注意されたい。

(注3) “plebeyismo”にはすでに神吉敬三氏の「平民風」という訳語があるが、プエルトリコ社会の文脈における用語として、神吉氏の訳を参考にここでは「庶民風」と訳した。神吉敬三訳「ゴヤ論」(『オルテガ著作集3、芸術論集』白水社 1970年)を参照。

(注4) Quintero Rivera, A. G., “Historia de unas clases sin historia para el análisis cultural,” *Cuadernos* (CEREP), 1983年9月。

志柿光浩(筑波大学大学院)